タイムスリップ

ふじた あきじ

時代は 400 年程さかのぼって江戸時代、お馴染みの長屋に住まいする熊さん、あの道その道の通を自認している。久しぶりに、長屋の名士と自認する八三郎の家を訪問した。この人は今は素浪人だが昔は侍であったらしい。

八三郎は少し前に女房を亡くして独り者。寂しいだろうと熊さんが慰めにのぞいたところである。

「時に　八三郎さん、お宅は先祖伝来の大層立派な名刀をお持ちと聞きましたが、ちょいと拝ましてもらいたいと思ってね。」

「代々親譲りの名刀だが、人様に見せるほどの代物でもないと思うがね。それが最近鞘をなくして、抜き身のままでは危ないので、ぴったし合う鞘をさがしいてるところでござる。」

「おおそうかい、俺も手入れのうまい人を知っているので一度当たってみてもいいですぜ。」

「そうかい、それでは当てにして待っているよ。最近抜き身のままほっておくもんだから、傷がついたり錆付いたりして使い物にならないのではないかと心配していたところだよ。」

二、三日して、熊さんがやってきた。話はとんとんと運んで、さっそく紹介してもらって頼んだら、鞘ご持参のなかなかいい磨ぎ師さんで、急いで磨いでもらった。様子を伺いに来た熊さんに、八三郎が言うことには、

「熊さん、上手な磨ぎ師さんを紹介してもらって喜んでいます。きれいに磨いてもらって助かってるよ。これからも度々磨ぎにだして錆びないよう大事にして、長持ちするよう努力しますのでよろしく頼みます。最近は磨いてもらうと気持ちよくて誠にすっきりしています。」

「それはよおござんした。」

「ほんとうにありがとうよ。これからは鞘に収めたまんま毎日抱いて寝たいと思うくらいです。だから熊さんの方には足を向けては寝られません。」

「どうなさるんで。」

「どうするの、お父さん起きる時間ですよ。」という娘の声が聞こえたような気がして男は目が覚めた。

タイムスリップから無事帰達したみたい。